

ウィーンの街とミロのリトグラフ

在ウィーン国際機関日本政府代表部大使 天野 之弥

私が、初めてウィーンを訪れたのは1970年代初めのことである。外務省に入省したばかりの頃で、ブザンソンという町でフランス語の研修をしていた。フランス語研修といえば聞こえは良いが、現実には厳しい。フランス語は大学などで少し勉強した程度だったので、聞き取れない、わからない、話せないの3重苦の毎日だった。



そんなもどかしさもあって、ブザンソン時代は、休みを利用してよく旅行に出かけた。こうして訪れたのがウィーンである。中古のオペルで、トリノ、ピサ、フィレンツェ、ミラノ、ヴェニスを回って、ようやくウィーンに着いた。

不思議なことに、ウィーンの街自体の記憶は全くない。ただ1つ覚えているのは、街角の小さな画廊とそこで買ったミロのリトグラフである。当時のウィーンの街は今よりずっと暗かったが、画廊の一角に飾られたミロだけが明るく輝き、ひと目で自分のものにしたくなった。研修生にとっては、目の玉の飛び出るような値段であったが、持ち合わせの現金をかき集めて買った。

悲惨だったのはブザンソンへの帰り道である。手元に残ったのはガソリン代だけだったので、ウィーンからチロルを通り、スイスを抜け、一日でブザンソンまで帰り着く計画を立てた。そして、ようやくオーストリア・スイス国境までたどり着いたとき、石油危機のためにスイスでは休日の車使用が禁止になったことを知った。やむを得ず、もと来た道に戻り、イタリアに抜け、ほうほうの体でブザンソンに帰り着いたが、今ではどこをどう帰ったのか思い出せない。

苦勞して手に入れたミロのリトグラフは、ブザンソンの下宿を飾り、ニースのアパートの壁を飾った。たった一枚の版画で、部屋全体が輝き、気持ち明るくなった。そのミロのリトグラフも、引越しを繰り返すうちになくしてしまい、今は手元にない。残っているのは、若かった頃のささやかな無謀と街角の画廊の思い出である。

<プロフィール>

1972年外務省入省。軍縮不拡散・科学部長を経て2005年8月から現職。2005年10月から1年間IAEA理事会議長、2007年春NPT運用検討会議第1回準備委員会議長を務める。



2005年、ノーベル平和賞受賞記念式典



NPT運用検討会議第1回準備委員会